

## 『うつほ物語』の〈秘琴〉と〈あて宮〉

——「繋がり」の形成をめくって——

猪 川 優 子

はじめに——「縦の繋がり」と「横の繋がり」

『うつほ物語』は、わが国初の長編物語として文学史上に位置しているが、先学の研究が明らかにしているように、その成立は複雑な経路をたどっている。中でも、この物語に存する二つの冒頭表現に関しては、「俊蔭」の巻と「藤原の君」の巻とのいずれが本来の首巻かという問題として大きな争点であった。しかし、本稿においては成立過程の問題に立ち入るのではなく、この両巻が物語に二つの話題の流れを形成しているという点に着目する。

室城秀之氏は、かつてこの二つの流れを「俊蔭一族の琴の家の物語」「正頼家の求婚の物語」と称し、この物語を「二つの△家∨の王権獲得の物語」とであると説かれた。そして更には、前者が「縦の繋がり」によって支えられ、後者が「横の繋がり」によって支えられているという二つの論理の存在を指摘された。本稿では「王権獲得」云々の問題については触れることをしなないが、縦の繋がりとは横の繋がり

とを物語に認めるといふ点に関しては室城氏の考えを踏襲する。ただし、「俊蔭一族」縦の繋がり」「正頼家」横の繋がり」という対比構造に限定するのではなく、二つの一族それぞれの縦横の繋がりについて見ていくことを出発点とする。

ここで、本稿の出発点となる「縦の繋がり」と「横の繋がり」とについてふれる。基本的には、前者は一族内部に世代を越えて受け継がれる繋がりであり、後者は一族と他の一族との間の同世代の繋がりである。しかし、それらが物語中において意味を持つ繋がりであるためには、そこに特別な何かが存する必要があると思う。この視点から物語に目を向けると、俊蔭一族における秘琴と、正頼一族におけるあて宮とが、特別なものとして浮かび上がってくる。本稿では、この〈秘琴〉と〈あて宮〉とに着目し、それぞれが一族の繋がりにおいて担う役割について論じていく。

### 一 俊蔭一族の「琴」

まず、俊蔭一族について見ていく。俊蔭一族とは、波斯国に流離し、琴の名器と秘曲とを伝授された琴の一族の始祖俊蔭から、俊蔭女、仲忠、いぬ宮と四代にわたる一族を指す。この四代の繋がりがあるわち物語における俊蔭一族の「縦の繋がり」である。俊蔭一族の繋がりには意味を持たせるのは、琴であり、本稿における琴とは、俊蔭が波斯国において授かったすべての琴を指す。そして、そのうちの天人によって名付けられた南風と波斯風との二琴を特に秘琴と称

して論を進める。以下、俊蔭一族が琴の力を用いて人々の間に縦横の繋がり形成していく様を述べるが、琴とその秘曲とはそれぞれ果たす役割が微妙に異なるため、双方から考えることとする。

俊蔭一族は、琴を継承することによって「縦の繋がり」を形成する。ここで一族に継承されるのは、秘琴である南風と波斯風、そして秘曲伝授に用いられる細緒風と龍角風である。先に、この四つの琴を除くその他の琴が持つ意味について考える。それは、俊蔭一族が「横の繋がり」を形成する際の重要な手段としての意味を持つ。俊蔭一族は、継承に用いる以外の琴を他人に贈与することによって、「横の繋がり」を形成していくのである。

琴の贈与は、俊蔭が三十の琴を授かったときから始まる。俊蔭は、波斯国内の様々な人物との邂逅を通して秘曲を習得していく。そして、すべてを身に着けた後、同じ道筋を逆に辿って、以前出会った人たちに琴を贈与する。贈与という行為によって、俊蔭一族は彼らとの「横の繋がり」を保ち続けるといえる。俊蔭はその後帰京し、今度日本において琴の贈与を繰り返す。「横の繋がり」を上げていく。贈与の対象は地位や権力を持つ人たちである。そこには、最高権力者である帝も含まれる。俊蔭は波斯国の帝にも琴を贈与しているが、これも強い権力との「横の繋がり」を示すものといえよう。なぜ琴を贈与することによって「横の繋がり」が形成されるのか。それは、俊蔭の琴が他の贈り物と異なり、贈与された後も俊蔭一族にとって意味を持ち続けるからである。俊蔭一族が手中にしたのは、琴と同

時にその秘曲である。秘曲は一族の内部にあって奏法が外に漏れることはない。一族はその秘曲を、贈与した琴を用いて披露する。帝の御前や貴人の家において琴を弾く機会が与えられるのである。贈与の後も、ひとたび俊蔭一族がその琴を手にして秘曲を奏せると、琴は奇瑞を起こす。この琴の威力は、単なる物語の彩りにとどまるものではない。その後の展開の場面場面において、琴ひいては一族の威力を改めて見せるといふ働きをもつのである。これは、先に作り上げた「横の繋がり」の再確認であるといえる。

俊蔭は、帝を含めたほとんどの貴人に琴を贈与し「横の繋がり」を形成した。しかし、ここで俊蔭一族の贈与行為が終わるわけではない。仲忠の世代に至ってはじめて物語に登場する新しい貴人が存するからである。その貴人、すなわち仲忠が贈与を行う相手とは、仲忠に対峙する人物として位置付けられる源涼である。この物語の特徴として、巻を重ねるごとに人物が付加されていくことが指摘されているが、涼もその一人である。涼は嵯峨院の落胤であり、仲忠にまさる財力を持っている。その涼に対して仲忠は、家に残されていた宿守風を持ち出して贈与する。俊蔭一族は、物語において絶対的な地位を築くために、琴を贈与することで「横の繋がり」を形成する。そこで、新しい貴人であり物語に重要な位置を占めるようになるであろう涼を見逃すわけにはいかなかったのである。たとえ宿守風を手放すことになっても、繋がりを守るためには涼に琴を贈る必要があったのである。

秘曲は、伝授されることにより、俊蔭一族の「縦の繋がり」を形成し、それを強化する。秘されている故に俊蔭一族は物語の他の一族には類を見ない「縦の繋がり」を保っている。一方、秘曲を演奏することにより「横の繋がり」が形成される場合もある。ここで「演奏」とは、「披露」と異なり、他人に聴かせることを目的としない秘曲の演奏を指す。これは、俊蔭女と兼雅との再会場面に例を見る。このとき、俊蔭女は東国の武士の来襲という危険を回避するために秘曲を演奏していた。この演奏は一族内部のための意図的な演奏であって、兼雅との再会を祈念してのものではない。琴の音に、我知らず兼雅が引き寄せられる形なのである。結果として秘曲が一族の外部に漏れたのであり、俊蔭女は兼雅と繋がりを持つことになったのである。兼雅は、俊蔭女母子が住む「うつほ」の外側の世界、すなわち俗世を代表する人物である。俊蔭一族はこのとき、秘曲を演奏することにより俗世との「横の繋がり」を再形成したといえる。

また、秘曲を披露することにより縦横に形成した繋がりの中で威力が発揮されることは前述の通りであるが、ここで忘れてはならないのが帝の存在である。俊蔭一族は、秘曲を帝や院の御前で披露することに、官位を得ていく。実際に官位を与えることのできる権力を持っているのは帝のみである。そして、帝に旨を促す役目を担うのが院である。三田村雅子氏は、物語において、俊蔭一族が「天皇の前では弾かない」という「琴の原則」を貫いていると述べられるが、実はそうではない。俊蔭も俊蔭女も、帝の御前で秘曲を披露

している。また更に三田村氏は、「天皇と俊蔭一族の対立・緊張関係」を物語の構図として捉えておられ、その考えは、大井田晴彦氏にも、俊蔭の「朝廷への反逆」(物語は、琴の家と朝廷の対立という重い主題をもって始発)という形で踏襲されているが、本稿では、帝の御前で秘曲が披露され、帝に評価されることにより、一族の秘曲にはじめて価値が与えられると考え、三田村氏や大井田氏とは見解を異にする。帝は、秘曲を聴くことにより俊蔭一族を物語中に位置付ける存在なのであり、俊蔭一族にとって帝とは、重要でこそあれ、無視、ましてや反逆すべき存在ではないのである。

ここで、俊蔭一族と同じく秘琴と秘曲とを有する源涼について触れる。ここでは、容姿や資質、とりわけ琴の手が仲忠に劣らず、しかも血筋や財力では仲忠にまさる人物として造形されている涼が、なぜ物語中の位置付けにおいて仲忠の上位になり得ないのかを考える。涼は、弥行なる人物から秘琴と秘曲を伝授されるが、二人に血の繋がり、すなわち「縦の繋がり」はない。また、涼も仲忠と同様にいぬ宮に相当する娘を得るが、その娘は涼の琴の手を受け継ぐに値する資質を持たない。涼は勢力として見るとただの一個人にしかすぎず、貴人として仲忠に匹敵することは可能であっても、縦横の繋がりを物語に張り巡らせている俊蔭一族に取って代わるだけの力を持ち得ないのである。そして、仲忠が涼の上位に位置するということは、すなわち俊蔭一族の琴が経済力よりも優位に立つ至宝であることを意味する。

以上のように、俊蔭一族は、琴と秘曲を駆使して物語の中に「縦の繋がり」と「横の繋がり」を形成している。財力も血統も傑出しているわけではない俊蔭一族にとって、琴と秘曲とは、帝との繋がりをも形成する、威力ある切り札なのである。

## 二 正頼一族の「娘」

続いて、物語において正頼一族がどのように繋がり形成しているのかについて見ていく。正頼は俊蔭一族と異なり、正頼に至る代々の繋がり物語において描かれているわけではなく、一世の源氏である正頼が一族の物語の出発点となっている。正頼は、二人の妻との間に十二人の息子と十四人の娘を持っている。この大勢の子とりわけ娘が正頼一族の形成する繋がりとなる。そして、娘の中でも中心となって力を発揮するのが、九の君のあて宮である。

あて宮は、当代随一の美女として物語に登場する。そしてそのあて宮に、「藤原の君」の巻の実忠を始めとして次々と貴人達が求婚していく。その数十六人にのぼり、そこには仲忠や涼、春宮も含まれる。これは、あて宮が貴人達を正頼一族に引き寄せている、すなわちあて宮によって正頼一族は十六人の貴人との「横の繋がり」を形成しているのと同じことができる。しかも、あて宮のような存在が物語に唯一であり、匹敵する相手が他の一族に見出されないという点も、正頼一族にとって意味があり、その意味とは、唯一であるからこそ物語において勢力を持っている貴人のほとんどを一人で引き寄せる

ことが可能だったということである。

しかし、あて宮は唯一の存在であるが故に貴人たちを引き寄せることができた一方で、唯一の存在であるが故にすべての貴人たちと結ばれるわけにはいかなかった。そこで、正頼一族はまず、求婚者の中の最高権力者である春宮にあて宮を入内させる。ここで正頼一族は天皇家との「横の繋がり」を形成したのである。(あて宮)は、天皇家との繋がりも成し得るという点において、俊蔭一族の家宝である(秘琴)に匹敵するといえる。

続いて正頼一族は、あて宮に引き寄せられた春宮以外の貴人たちを手放さないために、彼らの多くをあて宮以外の娘たちの婿として迎え入れる。俊蔭一族が「琴」を贈与することによって「横の繋がり」を形成していく一方で、正頼一族は貴人達を「娘」の婿として迎えることによって「横の繋がり」を形成したのである。

正頼一族の「縦の繋がり」については、俊蔭一族と様相を異にする。俊蔭一族は琴を用いて縦横に直線的に繋がり形成していく。しかし、正頼から始まる正頼一族は、あて宮と多くの娘たちによってまず「横の繋がり」を形成した上で、「縦の繋がり」については、その後、繋がりしているそれぞれの家において縦に繁栄していくであろうことを予感するととどまる。

ここで、入内後のあて宮について触れる。春宮に入内したあて宮は、三人の皇子を儲け、新春宮の母、すなわち国母となる。天皇家にとってのあて宮という視点から考えると、あて宮は皇室の「縦の

繋がり」の一世代を担う存在であるといえる。(あて宮)は、正頼一族の側から見ると、一族の「横の繋がり」に必要な存在であるが、一方で天皇家によって見出された、「縦の繋がり」に必要な存在でもあった。当代随一の美女であり、唯一の存在であるからこそ、天皇家にとっても(あて宮)は、繋がりには欠くことのできない存在なのである。

### 三 (秘琴)と(あて宮)

以上において、俊蔭一族にとっての「琴」と、正頼一族にとっての「娘」とについて、縦横の繋がりにも果たしている役割を述べてきたが、ここで改めて両者を比べてみる。俊蔭一族は「琴」を貴人に贈与することにより「横の繋がり」を形成していく。その繋がりには天皇家をも含む。そして、繋がり成せるほどの力を琴に与えているのが(秘琴)及びそれに付随する秘曲の存在であり、その引き金となったのは、御前での俊蔭の秘曲披露である。一方、正頼一族も「娘」の婿に多くの貴人たちを迎え、「横の繋がり」を形成していく。「横の繋がり」の発端は、あて宮である。正頼一族の「娘」は俊蔭一族の「琴」と同じような役割を果たしており、(あて宮)は(秘琴)に匹敵する存在なのである。ここで、あて宮を含む娘たちの意思はすべて排除されている。この物語において女性が贈答の対象となることは他にも見られ、三田村氏の指摘によると、「女性を琴の祿にする、又は賭物(のりもの・かけもの)にする」という発想は、(中略)俊蔭卷

に始まって、あて宮東宮入内後の初秋巻に至るまで五回にわたって見られる」という<sup>9)</sup>。正頼一族の娘が「もの」として扱われ得るところに、琴との類似性が見出せるのである。

当のあて宮は天皇家に入内する。(あて宮)は、天皇家と結びつくほどの力を持つという点において、(秘琴)との類似が見られるのであるが、両者が全く同じというわけではない。(あて宮)が天皇家と直接結びついて血縁関係を結んでいくのに対して、(秘琴)は、初めに琴が贈与された後、場面場面において披露され、威力が再確認されることによって、一族が官位を得るなどの効果を発揮する。俊蔭一族は、繋がりを保つために常に琴を弾くという行為を繰り返さなければならぬのである。正頼一族の形成した繋がりには血縁関係であるが故に、持続的であり普遍的であるといえるが、一方、俊蔭一族の形成した繋がりには、秘曲を備えていなければならない分、一時的であるといえる。しかも、官位を得ることができるとはいえ、あて宮が春宮に入内して得ることのできた政治的権力にはとうてい及ばない。その後、天皇家に対して力をふるうことができるのは、外戚である正頼一族である。そこで、俊蔭一族も、仲忠の娘いぬ宮の入内を予感して、「楼の上」の巻を終えるのである。

### 四 「天の掟」をめぐって

「天の掟」という言葉は『うつほ物語』本文中の言葉であり、早く「俊蔭」の巻に見られる。本稿において「天の掟」とは、人間の力の及

ばない、天が定めた法則や運命を意味する言葉としてそのまま用いる。そして、物語においてこの「天の掟」に左右されるのは、秘琴と秘曲とを授かり、継承していく俊蔭一族である。

「天女の行く末の子」である俊蔭は、波斯国に流離して秘琴と秘曲とを授かり、「天の掟」によって琴の一族の始祖となる。そして、俊蔭も掟に従うよう父の遺言を受ける。また俊蔭は、三代後に天人の生まれ変わりが現れることを予言される。これが仲忠である。俊蔭一族は、いぬ宮を除いてすべて天によって定められた存在なのである。この「天の掟」が俊蔭一族に関与していく様については、高橋亨氏が詳しく論じておられ、本稿も高橋氏の論を受けて進める。

俊蔭一族は、「天の掟」によって授かった秘琴を閉ざされた空間の中で継承していく。ここでいう秘琴とは、秘曲を伴ったものであり、南風と波斯風の二琴のことである。これらの秘琴は、一族の外部の人間の目から極力隠される。始祖俊蔭は天から選ばれた存在であり、秘琴を授かる際には地上から難れ人々から隠された秘密の空間に天の力で導かれる。その後秘琴を継承する際には、一族だけの閉ざされた空間に入行って外部から完全に遮断する。それは、既成の空間である「うつほ」であったり、意図的に俊蔭一族が継承の場を作り上げた、京極邸跡の楼であったりする。これらの空間は、一族と秘琴だけの空間であるという意味において、たとえ地上に作られた空間であっても、俊蔭が秘琴を授かった波斯国の空間に通じるものであるといえよう。秘琴は常に天と通じており、天に属する俊蔭一

族の宝物的な存在なのである。もちろん、俊蔭一族は天人ではなく人間であるが、天に選ばれた存在ということで天に属すると見なされるのである。

一方のあて宮は当代随一の美女という特別の存在であるが、「天の掟」に属する存在ではない。あて宮が属しているのは地上である。〈秘琴〉が天に属する宝物であるというなら、〈あて宮〉は地上における宝物なのである。〈あて宮〉が宝物であったからこそ、地上の人々は得ようと切望したのである。そして、地上は天皇を中心とした世界である。地上の宝物である〈あて宮〉は、入内して天皇家に属することとなる。あて宮の内内は必然的であり、俊蔭一族が天に定められて宝物の〈秘琴〉を得たのと同じように、地上の世界で絶対的権力を持つ天皇家が定められて宝物の〈あて宮〉を得たということなのである。宝物は、選ばれた者のみ手に入れることができるのである。それ故、俊蔭一族の〈秘琴〉が、披露されることはあっても他者の手に渡ることはなく、一方、〈あて宮〉が俊蔭一族に組み込まれていくこともないのである。

〈秘琴〉と〈あて宮〉とを比べ合わせたとき、そこには「もの」であるか否かという決定的な差異が存する。ここで、この差異が巻き起こす事態について考える。あて宮が入内する際、あて宮の意志が排除されていることに関しては前述した通りである。あて宮がどこに属したいかは問題にならず、必然的に、選ばれた一族である天皇家に属することになる。形の上では、この時あて宮は正頼一族と天

皇家とを結ぶ「もの」として扱われている。しかし、実際には〈あて

宮〉は「もの」ではなく、人間である。俊蔭一族が琴の意思を考慮することなく一族の意のままに貴人達に贈与していくのとは事情が異なる。〈あて宮〉に琴と同じく拒絶や選択の余地がなくとも、〈あて宮〉は心ある存在である。それ故、〈あて宮〉は、宝物として地上に存在することに徹し得ないのである。このことは、時にあて宮自身の悲しみとして、時に春宮との不協和音として物語に描かれることになる。これは、宝物としての運命を背負ったあて宮の苦悩である。

苦悩は地上の世界において欠くことのできない感情である。あて宮は人間であるが故の苦悩を、意に染まぬ入内に抗えないことで味わう。あて宮を得ようと競った地上の貴人達も、得ることができずに苦悩する。〈あて宮〉は地上の宝物である故に、選ばれた天皇家に属するしか道がなかったのであるが、天に属する宝物の〈秘琴〉が秘されていたのと異なり、地上の貴人たちの目に触れる所に存していたため、貴人たちはこの宝物を得ようと苦悩したのである。そして、結果的にあて宮を得ることができた春宮も、あて宮の苦悩まではどうすることもできず、自身も苦悩することになる。春宮は、選ばれた者として〈あて宮〉を得るとともに苦悩をも抱えこむのである。〈あて宮〉をめぐる苦悩は、〈秘琴〉の継承や贈与の際には見られない、〈あて宮〉が心ある人間ならではのものといえる。

#### おわりに——仲忠とあて宮

『うつほ物語』において、仲忠とあて宮とはなぜ結ばれないのか。これは大きな疑問である。ここでは、両者の属する世界の相違という面から考える。これまで述べたように、仲忠は天に属する宝物である〈秘琴〉を継承していく存在である。一方、〈あて宮〉は地上の宝物として存しており、地上で継承される存在である。すなわち仲忠は宝物を継承する人物であり、〈あて宮〉は継承される宝物なのである。ただ、それぞれが属するのが天と地上という互いに相容れない世界であり、対する相手が〈秘琴〉と春宮とに定められている。それ故、仲忠とあて宮とは惹かれ合いながらも決して結ばれることはない。「天の掟」と地上の天皇家とは、絶対的に逆らえないものとして物語中に存しているのである。仲忠とあて宮との間にある苦悩は、天に属する者と地上に属する者とが出会うことよって生じたはずみであるといえよう。そして、両者を結ぶのが琴の音である。仲忠もあて宮も、奏法は異なるが琴を奏でる。仲忠はあて宮の琴の手に自分と似通うものを感じ、自分の奏法を教えたいと願う。あて宮は仲忠の琴の音に惹かれ、聴いてほしいと願う。しかし、その琴の音は、互いに属する世界が異なるため、決して響き合うことはないのである。

『うつほ物語』において、誰が幸せになったのだろうかと改めて考えてみると、仲忠もあて宮も涼も、そして春宮も、愛情の面では

決して幸せな結末に至らなかったことに気付かされる。また、恋愛以外においても、忠こそや藤菜といった苦悩する人物が多く登場する。このようにさまざまな苦悩が描かれているという面も、この物語の見逃すことのできない特色であるといえよう。

〔注〕

(1) 『うつほ物語』が先行物語を取り込みながら長編化の道を辿ったことは、野口元大氏「うつほ物語の形成——首巻をめぐっての問題——」(『国語と国文学』昭三〇・一二)などに説かれている。

(2) 前掲注(1)の野口氏の論文などに、「藤原の君」の巻が「俊隆」の巻に先行して成立したという説が見られる。

(3) 室城秀之氏「うつほ物語研究の現在の課題——うつほ物語の表現と論理・序説」(『国文学 解釈と鑑賞』昭五五・九)。

(4) 室城秀之氏「あて宮入内決定の論理」(『国語と国文学』昭五五・七)などによる。

(5) 片桐洋一氏が、「宇津保物語の方法——その一、執筆態度と執筆過程——」(『女子大文学』昭三六・二)において、「途中中断回想方式」と名付けておられる。

(6) 三田村雅子氏「宇津保物語の〈琴〉と〈王権〉——繰り返しの方法をめぐって——」(『東横国文学』一五 昭五八・三)。

(7) 前掲注(6)の論文。

(8) 大井田晴彦氏「吹上の源氏——涼の登場をめぐって——」『中古文学』第五八号 平八・一一)。

(9) 三田村雅子氏「宇津保物語の論理——祝祭の時間と日常の時間と——」(『論集中古文学2 初期物語文学の意識』中古文学研究会編 昭五四 笠間書院)。

(10) 高橋亨氏「宇津保物語——はじまりの世界の想像力——」(『論集中古文学2 初期物語文学の意識』中古文学研究会編 昭五四 笠間書院)。

(11) 京極の楼が異空間として京中に設定されたものであることに関しては、三田村氏が前掲注(9)の論文において指摘しておられる。氏は、「日常性に侵食されない祝祭の場」として楼をとらえられ、示唆するところが多いのであるが、本稿では、継承のための空間を「天」に通じるものにとらえて論じる。ここでの「天」は、聖なる空間としての意味も含んでおり、氏の述べるところの「祝祭の空間」に通じるものがあると思われる。

〔付記〕 本稿は、平成七年度に広島大学教育学部へ提出した卒業論文「宇津保物語」構造論」の内容の一部に、加筆・訂正して成稿としたものである。当初から御指導を賜っている竹村信治先生と妹尾好信先生に、記して御礼申し上げる。

——いかわ・ゆうこ、広島大学大学院博士課程前期在学——